

確信犯的な政府-メディアの愚民政策は、我々の末代の 恥・不利益となる

Greatchain

January 22, 2023

先回紹介した、追放された、ウクライナの元野党党首ヴィクトル・メドベチュクは、「欧米の政治家の大半は、ウクライナの平和など一切望んでおらず、反対に、平和を訴える人々は、西側から〈西側の民主主義に適合しない〉と言いがかりをつけられ、誹謗中傷されている」と言っている。

すなわち、ウクライナの平和を望む、**真のウクライナ愛国者**であるメドベチュク元党首を、わが国の政府やメディア、つまり我々日本人は、敵に回しているのである。もし我々が真実に目覚めることなく、この態度を取り続けるならそういうことになる。現に、世界的に「ジャパニーズ」は、かつての尊敬を失って軽蔑されつつある。なかんずくロシア人からの、日本人への落胆は、かなり衝撃的であったことが、随所に感じ取れる。

大きく意見が食い違っても、大して変わらないということもある。たとえば邪馬台国がどこにあったかで日本が2つに分かれても、そんなことはどうでもよい。しかし人命にかかわること、特に魂を奪われるか否かの問題となれば、そうはいかない。ロシアと、ロシアの敵という問題は、そういう問題である。

たとえば今日の「Sputnik 日本」にこんな記事が出ている：――

「ロシア西部のドネツク、ルガンスク両人民共和国で、ウクライナ軍の攻撃によって犠牲となった民間人が、昨年2月以降、これまでに少なくとも、4591人にのぼることが明らかになった。20日、ワシリー・ネベンジャ国連大使が明らかにした。

同大使によると、2022年2月17日以降、両共和国で犠牲になった民間人は、少なくとも4591人で、そのうち154人が子供だった。また、1万3000人戸以上の住宅、147か所の医療施設、560以上の教育施設が被害に遭った。2014年のウクライナにおける政変以降の被害を含めると、犠牲者の数はさらに多い。」

日本政府とメディアは、これをどう読むか？ おそらく、そんなことは「大ウソ」だと言うか、「小さな問題」と言うか、どちらかであろう。なぜなら、ロシアは初めから悪人であって、そんなことを発言する資格がないからである。しかし、プーチン大統領は、この「特殊軍事作戦」の目的は「**8年間ウクライナ政権によって、虐待や大量虐殺にさらされてきた人々を守るためだ**」と説明している。これも日本では、ほとんど無視されるか、理解されず、プーチンを「丑の刻参り」で呪い殺そうとする日本人さえいる。これはもう知能障害と悪意だけの問題としか言えず、その責任は主流メディアにある。

それに対して「ダヴォス会議」については、彼らは、「あれは身分の高い、権力を持つ人たちの集まりで、我々には近寄れない特別の人たちなのだ」と、**子どもたち**を洗脳するだろう。彼らは現実に、一種の霊力を持った人たちで、人々を思うままに従わせていると考えることもできる。(逆に、そう考えなければ、これほどの政府やのマスメディアの、非常識な言動は考えられない。)

ここで私は自分自身の不思議な体験の話をするが、興味のない方はここで読むのをやめていただいてよい――

私は 2019 年晩秋に、一種の脳障害を患い入院したが、そこで得たのは一口に言えば、魔術の世界のカラクリを知ったことだった。期間はほんの一週間足らずだったが、明らかにそれは夢でもなく、錯乱でもなく、全く別の異界に迷い込むような体験だった。今から言えばそれは、(病後に色々調べたところによると) 80 代の老人によく起こるとされる「せん妄」delirium であった。「痴呆」dementia ではなかったと思う。これが夢でない証拠は、私が病室から逃げ出そうとして大理石の壁に触れると、ひやりと冷たかったことである(夢でそういうことは起こらない)。もう一つ特徴は、昼間の場合、壁の白い部分やカーテンなどに、手書きの文字が現れては消えることで、英語が主だが、スペイン語のようなものや、ローマ字まで混じっており、奇妙な文章だった。

それを繰り返すうちに、文章の内容がなんとなくわかるようになり、それは医療について、医者のある方について述べたもので、この病院で何かが起こっているらしいことが推測できた。私がそれを言うと看護師さんたちは驚き、信頼されるという奇妙な関係が始まった。そこで彼らと話し合うという計画まで行ったが、彼らの間に対立があって、それは実現しなかった。…が、これは回復期のことである。

ここで私のポイントは、それより前に、患者としての私に起こったことで、私はこの体験を通じて、この世に悪意をもって私を怖がらせ、たぶらかす、魔術のようなものがあることを知った。私はこれと戦った。私は天涯孤独であり(妻や子の存在は抜け落ちていた)、この不気味な、恐ろしいものとだけ対峙していた。しかし私には、ある自信があった。私

は神の真理というものがあると信じており、このようなニセモノ、まやかしに負けるものと、自分に言い聞かせた。もしこの信念がなかったら、私はそのまま「持っていかれた」かもしれない。

私は映画で言えば、数篇からなる続き物の映像を見せられたが、今考えて、最も意味深長と思える、ある場面がある。私は10人くらいの患者仲間と病床を共にしていたが、我々は幽閉されていた。先に言ったように、大理石の壁や厚いガラス窓に閉じ込められ、そこから出ようとする、恐ろしい看護師の女に捕まり、「何をしている！」と、きつく叱られた。面白いことは、それぞれの患者が黙々と、それぞれ別の仕事をしており、そのすべてが魔術に関係していた。正確には思い出せないが、たとえば一人の患者が、わき目も振らず、一心不乱に折り紙のようなものを折っている。するとそれが突然、現実の花や動物になったりした。すべてが魔術だった。

あるとき、少し離れた隣の建物に明かりが灯り、我々よりも少し高いフロアに、数人の人が入ってきて、重要な相談を始めたことがわかった。会議は案外早く終わって人々は出て行ったが、この人たちが我々囚人を厳重に管理する重役であることが、カンでわかった。この場面が特別、印象深く私には残っている。

いったい、この全体としての魔術ショーは何だったのだろうか？ 私はただ単に、無意味な幻覚を見せられたとは思えない。そこにはすべて意味があり、これは我々の現実に生きている世界——魔術師のようなグローバリストと、それに立ち向かう、あるいは迎合する人間たち——の対立の絵模様のように思える。私はたまたま、その代表として選ばれたのではなかろうか？ これはあまりにも主観的な話であって、そっぽを向く人もいるだろう。しかし、今、あの世とこの世との境目が、不明確になってきているとも言われる。こういうことを人は一般に、口に出して言わないだけで、珍しくないのではないだろうか？